

世界自然遺産：奄美大島、徳之島、沖縄本島北部、西表島について

奄美大島、徳之島、西表島、沖縄本島北部は、世界的に絶滅の恐れがある多くの固有種の生息地や、多様な生物の生態系を保護するため 2021 年にユネスコの世界自然遺産に登録されている。この 4 つの島は 1200 万年前から 200 万年前はユーラシア大陸の一部だったが、大陸が分散し、日本列島の南に位置する九州から台湾近くまでおよそ 1,200 キロの間にある琉球列島の一部となっている。

地形と地質の違い

この 4 つの島の総面積は 427 平方キロメートルで、地質も違う。奄美大島と徳之島は 50 キロほど離れていて、比較的似た地形をしており、常緑広葉樹が生い茂る山岳部から白い砂浜とサンゴが広がるリアス式海岸へ繋がっている。また、沖縄本島北部はやんばる森林が広がり、西表島は日本最大のマングローブ林と亜熱帯のジャングルで覆われている。全ての島は亜熱帯地域に位置しているため、平均気温は 21～24 度、年中湿度は高く、降水量も多い。

孤立と固有種

島の立地と地質から独自の動植物が生まれ、暖流の黒潮が温暖湿潤な気候を作り出し、維管束植物は 1,819 種、陸生哺乳類 21 種、鳥類 394 種、陸生爬虫類 36 種、両生類 21 種など、多種多様な生物が生息するようになった。また、数千年もの間、島と言う孤立状態が各島の固有種の進化に繋がる。日本の国土の 0.5%にも満たない面積に 95 の絶滅危惧種が生息し、その中でも 75 は固有種である。アマミトゲネズミ、ケナガネズミ、アマミヤマシギ等 20 種が進化的に独特かつ地球規模の絶滅危惧種である EDGE 種に指定されている。その他にも奄美大島と徳島に生息するアマミノクロウサギ、沖縄北部に生息するヤンバルクイナ、西表島のみ生息するイリオモテヤマネコも絶滅の危機に陥っている。

人的要因

古来より琉球民族は、自然環境に近いライフスタイルを重要視していた。伝統的な信仰と社会構造が希少な固有生物や植物を守ることになった。伝統的な村の配置は、持続可能な建築モデルで形成されていて、土地の利用方法は人々が管理し、サンゴ石灰岩の壁や生垣などの自然から得た素材が雨風から守るために使用されている。孤立していたため、島民は周辺の海や大地から取れる自然素材を活用し、道具を用途に合わせ制作し、織物や民芸品等は代々伝わった。伝統的な信仰では、島の山に神が宿り、地平線の向こうの海には楽園があると考えられていた。神はノロと言う巫女によって年内の行事で迎えられる。行事では、地域民の意識を高めるため相撲や歌、踊りなど行われた。この琉球文化は、人々の日常深く根付いている。

環境への配慮

世界自然遺産は持続可能な観光を推奨し、壊れやすい環境へ極力影響を最小限にし、保全を支援するよう努力している。そのため、観光客の人数制限、観光範囲の管理、フィールドワークの経験と認定を持つガイド等も実施している。

